

# 印度国民運動の由来

# 本日本日

〔解説〕一、「吾等の正義は一貫徹底の正義でなければならぬ。吾等の手に在る劍は双刃の劍である。其の劍は亜細亞に漲る不義に対して峻厳なると同時に日本に巢喰ふ邪惡に対して更に秋霜烈日の如し。かくて亜細亞復興の戦士は否応なく日本改造の戦士でなければならぬ。啐啄一時、大乗日本の建設こそ取りも直さず眞亜細亞の誕生である」(前掲「復興亜細亞の諸問題」序文)との大川博士の断言は、大正末期より昭和五・六年(一九三〇—三二)にかけての急迫せる内外の時局に対する指針であった。この時期に於ける博士の身辺はまことに多事であり亦多彩であった。革新運動の關係は暫く措

き、著作を通うして之を觀れば、第一巻収録の「日本及日本人の道」「日本精神研究」「国史概論」「日本的言行」は凡てこの期間の著作である。而してここに復興アジアに關するものとして此期間に於て特に留意すべき四著作がある。

第一は、大正十三年刊(一九二四)「復興印度の精神的根柢」(東洋研究會)であつて、「印度復興とは印度に内在する昔乍らの生命が芽出度き春に回り会ひ新しき力を帯びて捲土重来することである一すなわち「復興印度の原則は取りも直さず改造日本の原則である」とする大川史觀の定立である。その二は、大正十四年刊「亜細亞・歐羅巴・日本」(大東文化協會)であつて、「世界史とは東西兩洋の対立・抗争・統一の歴史である」として全亞細亞並に日本の負うべき世界史的使命を啓示せるものである。この二書は共に大川思想の正しき理解のためには此所に掲出すべきものであるが、(一)は昭和十五年(一九四〇)十二月刊「亜細亞建設者」(ガンディーの出現)の中に、(二)は昭和十八年(一九四三)六月刊「大東亞秩序建設」の中に収録されているので、重複をさけて夫々の書名に於て掲出した。第三は昭和二年(一九二七)二月刊「特許植民会社制度研究」(第五巻収録)で大正十五年(一九二六)の学位論文である。一、第四書がここに掲出する「印度国民運動の由来」であつて、英國の印度支配と日本の朝鮮統治との根本的相違を明らかにして印度獨立運動の本質を明確にした貴重なる文献である。

## 印度国民運動の由来

## 一 朝鮮統治と印度統治

印度に於ける国民運動の勝利の歩みが、吾国の朝鮮統治の上に、面白からぬ影響を与へはせぬかといふことは、かなり多くの人々が抱いて居る心配のやうに見受けられます。この心配は、私が段々と説明して行くうちに判りまするやうに、決して抱いてはならぬ心配であります。さり乍ら、無病息災の人でも、何かのはづみに、自分の健康について疑惑を抱き初めると、ついには「病ひは氣から」と申すやうに、本当の病人になつてしまふこともあります。同様に朝鮮統治の場合も、抱いてはならぬ心配を抱いて居れば、それがやがて事実とならぬとも限りませぬ。それ故に私は、英国と印度との關係が、最も重要な諸点に於て、如何に日本と朝鮮との關係と違つて居るかを、先づ明かにしたいと思ひます。而して之を明かにすることが、やがて印度に於ける国民運動の由来をも明かにすること、なるのであります。

第一に、日本の朝鮮合併と、英国の印度領有とは、その動機に於て本質的の相違があります。英国の印度征服については、シーリー教授が「英国膨脹論」の中に、適切に之を説明して居ります——「今日まで英国人の行へる大業中未だ曾て印度征服の如く爾く無意志に、且つ爾く偶然に行はれたものは無い。……吾等は、一事を志しつゝ、却つて別事を成し遂げたものである。吾等の目的は、素と貿易に存し、而して其の貿易もまた特に成功したのではない。而して土民諸邦との戦争の如き、吾等が印度に到りて一百年を経るまでは、殆ど夢想だもせざりしところである。漸く

一百年を経て、吾等は貿易を支持するために、戦争の必要を感じた。而して吾等が多少、著しく土地の獲得を念とするに至つたのは、更に半世紀以後のことに属し、土民諸国に対して優越権を得るの政策を執つたのは、殆ど第十九世紀に入りて以後のことである。吾等が現在の優越的地位を占むるに至りしは、今より四半世紀を経ること甚だ遠からざるダルハウジー卿の総督時代である。吾等は初めより常に一方を望んで、而も他方に活動せるものである」と。事実その通りで、英国は純然たる営利を目的として印度に來り、その目的のために之を征服し、之を統治するに至つたのであります。然るに日本の朝鮮合併は、独立の能力なかりし朝鮮が、万一他国の領有に帰する場合、わが国は宛も長槍を胸中に擬せられると同様の脅威を感じるが故に、直接には国防上の止み難き必要から、而して惹いては東亞全局の平和を確保する必要から、行はれたものであります。それ故に両者の動機は、本質的に異なつて居り、この動機の相違から、統治の精神も自ら異つて來るのであります。

第二に、印度及び朝鮮は、それぞれ英国及び日本に対して、内面的並に外面的に根本的に異なれる關係に立つて居ります。之を外面的即ち地理的に見ましても、朝鮮と日本とは一葦帯水の隣接地帯でありますが、印度は英国から非常に遠隔の地に在ります。従つて朝鮮と日本が一つになることは極めて自然であり、且つ一つになることが東洋の平和を確保する上に必要であることは、事實が明白に立証して居ります。然るに英国の印度領有は、疑ひもなく不自然であり、それ故に之を保持するためには数々の無理を遂行しなければならず、勢ひ他国の利害と衝突を招き、世界の平和を脅す原因となつて居ります。事實第十九世紀に於ける國際的紛糾は、印度領有を脅すといふ理由の下に、ロシア勢力の南下を阻める英国の政策に起因して居ります。而して世界戦争の重大なる原因の一つも、同じく印度保全を脅威するものとして、バグダード鉄道によるドイツの東方進出を阻むことに在つたのであります。

之を内面的即ち文化的に見ますれば、日本と朝鮮とは、ともに儒教及び仏教を精神的根柢とする東洋文明の場であ

る上に、人種約にも殆ど同種といふべき間柄であり、彼我の往来は建国以前よりのことであつたのであります。然るに英国と印度とは文化的に何等の共通なく交渉もありませぬ。希臘思想と羅馬法と基督教とを根柢とするヨーロッパ文明と、吠陀の思想に精神的根柢を有する印度文明とは、南極と北極とが相距る如く遠く隔つて居ります。かくて日本の朝鮮統治は、同文同種の民を治めることであり、英国の印度統治は、異文異種の民を治めることでありますから断じて之を同日に語ることを許しませぬ。従つて英国の印度統治は、わが朝鮮統治にとりて、若干の参考にはなりませんけれども、万一にも之を模倣しやうなど、考へるならば、それは最も恐るべき危険を招くことになります。ひとり英国の印度統治のみならず、欧米の植民政策は、総じて人種を異にし文明を異にする民族に対して行はれるものであります。が故に、一として朝鮮統治の模範とすべきものがありませぬ。

第三に、日本と英国とは、その領有の当初から、それと朝鮮及び印度に対して、全く認識又は理解の程度を異にして居ります。日本と朝鮮との交通は、実に国初以来のことである上に、もととく同文同種の間柄でありますから、併合当初から、日本は朝鮮及び朝鮮人について、假令十分でないにしても、相当に精確なる認識を有して居たのであります。従つて過当に之を評価せぬ代りに、過少にも評価することなく、当らずといへども遠からざる程度に理解して居りました。然るに英国は、当初より甚しく印度の認識を誤り、印度及び印度人を法外に劣等視したのであります。而して此の誤れる認識、この認識に基づける英国人の印度人に対する態度が、実に今日の排英運動を招きたる根本の原因であります。が故に、私は少しく詳細に此間の事情を申上げたいと存じます。

## 二 英国人の対印態度

初めて印度に来れる英国人が、甚しく印度及び印度人を見縊つたのには見縊るだけの理由があつたのであります。

若し英国が、それ以前の印度征服者の如く、西北より印度に侵入したのであつたならば、恐らく印度及び印度人に対して、もつと高い評価を与へ、従つて英国の印度統治史も、甚だ面目を異にして居たことゝ存じます。何となれば英国が初めて渡来したところの印度は、假令衰退頽廢の時代であつたとはいへ、北部印度や中央印度の内地には、尚ほ英国人の眼を驚かすに足る燦然たる印度文明の遺跡が、随処に存在して居たからであります。然るに英国人は、海を渡つて印度に來たのであります。その自然の徑路として、或はガンジス下流の低湿にして不健康なる三角州から、或は貧乏の極にありしコンカン地方から、徐々に印度内地に侵入して行つたのであります。従つて印度に対する英国人の第一印象は、極めて面白からぬものであつた。即ちベンゴール地方に駐まりし英国人は、墮落せる地主、不正直極まる商売人、柔弱怯懦なる学者や僧侶と接觸した。またコンカン地方は丁度今日の支那の一部のやうに、賤賊横行して、殆ど無政府に等しい状態に在つた。而して古き印度文明は、モーガル帝国の崩潰と共に、腐敗墮落の最後の段階に在つた。初めて印度に來りし英国人は、先づ是くの如き印度及び印度人を目撃したのであります。彼等は何等印度に関する予備知識を有たなかつたが故に、印度哲学の如何に深奥であるか、サンスクリット文学の如何に豊麗であるか、古代印度文明の如何に莊嚴なりしかを知るよしもありませぬ。また今日の比較宗教学者が印度教を見るが如き眼を以て、印度人の宗教的生活を見る道理もありませぬ。彼等は其眼に映じたる限りに於て印度及び印度人を評価し、唯だ奇怪極まるもの、卑しむべきもの、晒ふべきものとして、之に対したのであります。この第一印象が、ついに彼等の先入主となり、其後印度研究が進むにつれ、印度の思想文明の意義と価値とが次第に闡明されてからも、感情の上では依然として之を輕蔑して居たのであります。それは子供の時に幽霊が恐ろしいといふ感情をつぎ込まれると、大人になつて理性の上では幽霊の存在を否認しても、夜更けて墓場を通ると薄気味悪く感ずるのと、同じ人間の心理であります。この感情があります故に、其後に至りても英国人は社会的に印度人との交際を避け、例へばロシア人

がトルキスタンに於て、又はトルコ人がメソポタミアに於てなせる如く、印度の上流階級とでさへも、決して対等の交際をすることが無かつたのであります。

而して一八五七年の印度兵叛乱以後は、この輕蔑の感情の上に、激しき憎しみの感情が加へられたのであります。この印度兵叛乱は、危く英国の印度支配を覆さんとし、叛乱鎮定の翌年に、印度統治は東印度会社の手から英国政府に移され、次で一八七六年ギクトリア英国女王が印度帝国女帝を兼ねること、なつたのであります。この叛乱に際して、印度人が英国人に加へた数々の危害、之に対する英国軍隊の言語に絶する殘虐なる復讐、この殘虐に対する印度人の深刻骨に徹する怨みが、英国人と印度人との間に、ついに踰ゆべからざる感情の溝を掘つてしまつたことは、また是非もない次第であります。

さて印度兵叛乱も、もとを訊せば英国人が印度の正しき認識と理解とを欠き、従つて其の統治を誤つたことに起因するのであります。私は此事について二三の実例を挙げたいと思ひます。最初に印度の教育制度を立案した人は、名高きマコーレーであります。此人でさへ如何に印度人の宗教生活を理解して居なかつたか、印度教について如何に誤れる独断を抱いて居たかは、一八三六年に書かれた下の文章を見れば明白であります——「私は堅く信じて疑はない、若し吾等の教育案が実施されるならば、今後三十年にして、ベンゴールの上流階級には一人の偶像崇拜者を見ざるに至るであらう。而も此の目的は、毫も改宗運動を試みることなく、而も宗教的自由に干渉することなく、たゞ知識と反省との自然の効果によつて遂げられる」と。

ペシヤワル長官エドワーツは、一八五三年に下の如き驚くべき意見を發表して居る——「印度が英国のものとなりし理由は英国が基督教を最も純潔なる相すがたに於て保持するために最大の努力を払ひ、一切の偶像崇拜に対して最も強硬に反対し、且つ聖書に頭はされたる唯一者以外に、如何なる仲介者をも求めざりし故である」と。

而してパンジャブ知事サー・ドーナルド・マクリオッドは、一八六五年に印度の基督教化を主張して、下の如き意見を述べて居ります——「若し吾等にして、印度の領有を確保せんと欲するならば、之を基督教国たらしめるために全力を注がねばならぬ。吾等は多量の智識ある青年を改宗せしめつゝあるが、若し彼等にして基督教に帰依するに非ずば、必ず印度人中の最も危険なる分子となるべきことを信ずる」と。

如上の引例は、印度に於ける初期の英国政治家が、如何に印度を觀て居たか、而して其の觀察が如何に誤つて居たかを物語るものであります。要するに当時の英国政治家は、印度人を以て未開又は半開種族の如く考へ、ヨーロッパ人共通の定石に従ひ、之を基督教化することによつて、統治の実を挙げ得るものと考へて居たのであります。

唯だ此間に在りて、マドラス知事サー・トマス・マンローだけは、卓抜なる識見を抱いて居ました。彼は既に夙く一八二七年に於て、実に下の如き意見を述べて居ります——「吾等は、将来印度人が、殆ど一切の官職、如何に高き官職にでも、任用せらるべき時代の來ることを覺悟し、その經驗に應じて印度人を次第に高き任務に服せしめ、やがて來るべき時代の準備をしなければならぬ。印度人を高官に任用することは、彼等のためであると同時に吾等のためでもある。そは政務を運用する上に經濟であり且つ効果的である」と。

この正常なる意見に従ひ、ペンティンク卿が、初めて若干の印度人を行政官並に司法官に任用し、一五三三年には印度人がロンドンに於て印度文官試験を受ける資格を与へられ、一五五八年にも此事は法律によつて確保されましたけれど、不幸にして印度兵叛乱に伴へる英国人の印度人に対する憎悪と不信とは、かねてよりの輕侮蔑視の感情と相絡みて、久しく此の主義を有名無実のものたらしめて來たのであります。

現在印度の人口は、約三億二千万であります。そのうち英国人の数は、僅に十六万三千に過ぎませぬ。その大半は官吏と軍人で、他は農園經營者と商人であります。東印度会社は、ヨーロッパ人の印度移住を阻止して居ましたが

此の方針は印度帝国となつてからも変化がなかつたのであります。爪哇では二千八百万の人口のうち、七万人のオランダ人が居ります。印度支那では、二千万の人口に対して、約一万のフランス人が居ります。之に比べて、印度に於ける英国人の全人口に対する割合は、極めて低いのであります。その結果として英国人は、印度に於て全く独立せる又は隔離する階級として住んで居ります。モロッコに於けるスペイン植民地やフランス植民地には、或は小百姓として或は職人として、或は小売商人として、或は田舎宿屋の主人として、到る処に母国人が土民の間に散在し、それが中間階級として治者被治者の間に介在して居りますが、印度に於ては斯様な役目を勤める英国人階級が、絶対に存在しないのであります。これが英人と印度人との間を、一層疎隔させて居ることは、いふまでもありません。

朝鮮総督府は、常に母国人の朝鮮移住を阻止せざるのみならず、極力之を奨励して居ります。朝鮮の人口は千九百万で、内地人の数は四十七万であります。決して多いとは申されませぬが、三億二千万に対する英国人の十六万三千に比ぶれば、比較にならぬほど高い割合でありますのみならず朝鮮在住の日本人は、決して朝鮮人と隔離した生活をして居りませぬ。それぞれの階級の日鮮人は、皆な対等に交際して居ります。最近の豆相震災に際しても、丹那トネルで生理めになつた三人の朝鮮人土工を助け出すために、生命の危険を冒して日本人工が必死に働いた。不幸な鮮人土工の一人は、日本婦人を妻とし、其妻は日本名前をつけた二人の仲の子供をつれて、泣きながら夫の安否を氣遣つて居るのであります。此等の事情を見ましても英国人の印度に於ける地位・態度・生活と、日本の朝鮮に於けるそれとの間に、非常なる相違のあることを知り得るのであります。従つて朝鮮と印度とを、単に等しく植民地であるが故に、同一範疇に入れて取扱ふことの、如何に誤れるかを知り得るのであります。

### 三 印度兵叛乱の影響

印度に於ける英国人と印度人との關係が上述の通りであるとすれば、印度に於て排英感情が激発し、それが排英運動となつて現はれることに、何の不思議もありません。一八五七年の印度兵叛乱が、既に強烈なる一個の排英運動であつたのであります。さり乍ら第十九世紀前半に於ける印度の有識階級は、仮令一面に於て英国人に対して反感を抱いて居たとは言へ、ヴレンティン・チロルが指摘せる如く、他面に於ては実に英国人が齎らせるヨーロッパの思想及び文明に対しては、むしろ之を崇拜し謳歌して居たのであります。昨年悲惨なる最期を遂げた印度國民運動の最大の指導者の一人ララ・ラージパト・ライは、其の好著『青年印度』の中に、當時に於ける印度新人の英国崇拜の有様を、目に見る如く述べて居ります——「英人は新聞を読む。そこで印度人も自分たちの新聞を始めた。英人は俱樂部や教会に集まる。そこで印度人も同様のものを始めた。英語を知る印度人は、得々として其の先生を真似た。彼は其の服装を採り、其の葉巻とパイプを採り、其の酒杯とピフテキを採つた。彼は印度生活を蔑すみて、英吉利化されることを誇りとした。彼れの眼には、一切の印度のものが悉く愚劣に映じた。印度人は未開人であり、其の宗教は迷信の巢窟である。彼等是不潔の民であり、其風俗習慣は野卑である。彼等は狭量なる偏見者にして、人間の本性は自由であると云ふことを知らない。かやうな調子で英人は一から十まで印度人の模範となつた。若し英人が教会に行つて聖書を読めば、彼等また之に倣つた。若し英人が自由思想を抱けば、彼等また之に倣つた。彼等は万事英人の如くならんことを欲したのである」。

かやうな次第でありますから、若し一八五七年の叛乱がなく、また此の叛乱鎮定に際する英軍の殘虐がなく、叛乱後に於ける英印両者の激しき憎悪が、何等かの方法で拭ひ去られて居たならば、ギヤラット其他の英国人も言つて居

る通り、よし地方的に時々の騒動は起つても、教育ある印度人は次第にヨーロッパ化せられ、従つて今日の如き国民運動の発展を見るに至らなかつたかも知れぬと思ひます。

然るに印度兵叛乱以後に至りて、屢々勃発せる政治的並に宗教的暴動が、次第に国民的性質を帯びて来た。それは此の叛乱が印度人に国民的自覚を与へたからであります。次には印度の有識階級が、ヨーロッパ文明に対して懷疑的となり、甚しきは之を侮蔑するやうになつた。それは此の叛乱に際して、英国軍隊が殆ど信ずべからざる惨虐を印度人に加へたからであります。当時ロンドン・タイムスの通信員として印度に駐在して居たラッセルの『印度日記』によれば、英軍は回教徒を捕へて、之を彼等の最も汚れたるものとする豚皮の囊に包み、之を豚油に浸して焼殺して居ります。デーリに於て数千の無辜の民が虐殺された。村々は焼払はれ、住民は屠り尽された。ネール將軍の進むところ如何に野に生色なき惨状を極めたかは、ラッセルの言によつて明かであります——「ネールがアラハバードより進軍せる時、彼れの焼打が余りに乱暴で且度々であつたので、一士官は彼に向つて、かくの如く村々を荒らし過ぎては、軍隊の糧食を得る途がなくなると注意したほどであつた」。私は事細かに当時の英軍の乱暴を述べやうと思ひませぬ。輕蔑し切つた印度人から、あらゆる危害を加へられ、一時は支配權をも覆へされやうとしたことであれば、英人が憎悪と復讐の激しき感情に駆られ、あらゆる非人道的行動を敢てしたことは、ヨーロッパ人の常として、決して怪しむに足らぬことであります。

此の暴虐は、英人が如何に強大であるかを印度人に思ひ知らしめた。而も強大にして打勝ち難きが故に、印度人の憎しみと怨みとは一層大なるものとなつた。そのみならず英人の道德性に対する輕侮の念、従つて其の齎らせる文明の価値に対する侮蔑の情を、印度人の魂に植付けたのであります。之と同時に英人の印度人に対する悪意も強烈になり、ギヤラットが言へる如く、印度に対して三つの主義が遂行されることになりました。第一は英国人一名の生命

は、数十又は数百の印度人の生命に値すること。第二は印度を治むるには、英国の如何に恐るべきかを知らしむることが、最良の方法なること。第三には英国は印度を保有するために、多数の生命と多額の軍費とを犠牲とせるが故にその報償として単に印度を統治するのみならず実質的利益を収めねばならぬこと、三つの主義であります。

かくて英国は、叛乱以後に醸成された英印両者の悪感情を和げるために、何等の努力をせざりしのみならず、むしろ一層之を激成する如き態度に出たのであります。例へば英国人は屢々印度人を殺害して居りますが、之に対して少額の罰金を支払へばよかつた。印度参事会の一議員、即ち印度政府の大臣たりしサー・セオドル・モリソンは、一八九八年に下の如く述べて居ります——『英国人が屢々印度人を殺害することは、隠しても詮なき悪事である。今月のアムリタ・バサル・パトリカには英国人が印度人を殺害し、一も満足に罰金を支払はざりし三つの事件を論じて居る』と。一八七二年、約百名のシク教徒が、パンジャブの或町を襲ひ、英軍のために撃退された。残存せる六十六人がパティヤラ藩王国に逃れ、ついに英軍に投降した。而して其の翌曉に、一人残らず屠り去られた。此の不法行為の責任者フォアサイスは、後に取調べられて免職となつたが、英国人の同情は悉く彼に集まり、晩年には立身出世してサー・ダグラス・フォアサイスとなつて居ります。

同様のことが実に今日にも行はれて居ります。それは一九一九年四月、アムリツアルに於けるダイヤヤール將軍の虐殺事件であります。ダイヤヤール將軍は此町のジャリアンワラと呼ばれる空地、四方家々の高壁に囲まれたる空地に集まれる民衆に、何等の警告をも与へず猛烈なる銃撃を加へ、僅々十五分間に、五百の市民を即死せしめ、二千人を負傷せしめた。ダイヤヤール將軍は此事のために休職を命ぜられた。而も英国上院は当局のダイヤヤール將軍召喚を、軟弱政策として非難した。彼れの恩給は一厘一毛も減ぜられざりしのみならず、英国民は彼れを慰勞するために二十万円を醵金して彼に贈呈したのであります。英国人の印度人に対する斯くの如き心理が、排英感情を激発すべきことと言ふ迄

もないことであります。

#### 四 印度の国民的覚醒

かくの如くにして印度人の魂の裡に、英国人に対する憤怒・怨恨・憎悪の念が、年々深刻となり行くと同時に、他方ヨーロッパ文明に対する不信が、印度の有識階級に強烈なる精神的自覚を喚起し、その自覚は先づ宗教運動として現はれて来ました。即ちラーム・モハン・ロイのブラーマ教会、ダヤーナンダ・サラスワテイのアーリヤ教会、ラーマクリシュナの信仰団、及び此等の運動に刺戟せられし印度教内に於ける信仰の復活がそれでありました。

印度の場合に於て、宗教的覚醒は、常に国民精神の根本的覚醒を意味します。他国人ならば「卿は何国人か」と問ふ場合に印度人は「卿は何教徒か」と問ふのを見ても、彼等が如何に宗教的であるかを知ることが出来ます。それ故に、一度び印度が宗教的に覚醒すれば、やがて一切の精神的・知識的方面に於て、また覚醒を見ずば止まぬ道理であります。果せるかな同様の傾向が、先づ文学芸術の方面に現はれた。即ち散文に於けるパンキム・チャンドラ・チャッテルジ、韻文に於けるラビンドラナート・タゴール、絵画に於けるアバニンドラナート・タゴールは、それと各々の領域に於て、陸離たる印度的光彩を放ち初めたのであります。

翻つて哲学的方面を見れば、現代印度は、アラビンダ・ゴーシュの出現によつて、初めて真個の国民哲学者を得ました。彼れの哲学は、二十年に亘るヨーロッパ留学の間に得たる西洋哲学の蘊蓄と、自己の深刻なる精神的経験とによつて、薄伽梵歌の思想を闡明し開展して、之に周匝なる体系を与へたるもの、印度青年の魂に、正しき国民的自覚を喚起し、従つて革命的精神を鼓吹せる点に於て、彼れの人格及び言論の如く、深刻強大なるは無いのであります。彼は印度人に向つて下の如く教へた——「第十九世紀の印度は、政治的改革、社会的解放、宗教的復興を求めた。而

も此等の努力は、印度民族の精神と歴史と使命とを無視して、徒らにヨーロッパの動機と方法とを学び、ヨーロッパの教育、その機械、その制度を輸入しさえすれば、以て能く印度のためにヨーロッパ的なる繁栄と勢力と進歩とを招徠し得るものと考へた。それ故に一切の努力はついに失敗に終つた。第二十世紀の印度は、この悲惨なる経験に鑑み英国化する第十九世紀印度の、目的と理想と方法とを、悉く放擲しなければならぬ。印度は堅確に自己自身の路を歩みて、独自の生命と文化とを實現し、世界の面前に於てヨーロッパがついに解決し得ざりし政治的・社会的・経済的・道徳的問題を解決せねばならぬ。此の目的を遂行する方と方法とは、之を印度自身の魂のうちに求めねばならぬ。

彼れの教養はカルマヨーガー即ち行による實現であります。それは王陽明が「知は行の始、行は知の成るもの」と言つたのと、全く同一精神の上に立つ知行合一の哲学であります。この行の哲学は、無為寂靜を以て高尚なるかに考へたる印度人に向つて、単なる思索瞑想の無価値なること、行為こそ思索の實現且完成なることを教へたのであります。彼は山林に隠れる独善の生活を斥け、人間は一切の成敗を超越して、英雄的行動に終始すべきを説いたのであります。而して此の思想は、多数の印度青年に強大なる実行的意志を鼓吹しました。まことにアラピンダ・ゴシユは復興印度のために哲學的基礎を完成したものであります。

あたかも此時に当り、外には日露戦争に現れたる強烈なる日本精神が、深甚なる感激を印度人の魂に与ふるあり、内にはカーゾン卿のベンゴール両分問題が、多年鬱積せる印度人の不平に、爆発の導火となりたるありて、こゝに印度の国民運動は、明白に政治的、従つて革命的となつたのであります。

## 五 独立運動の擡頭

政治的に現はれたる印度の国民運動は、取りも直さず印度革命運動、または印度独立運動であります。而して印度

独立運動は、之をその発祥の地に從つて、三つに分つて説明するを便利とします。その一はボムベー及びプーナを中心とし、テイラクを指導者とせる運動、その二はカルカッタを中心とし、ゴーシヤ兄弟を指導者とせるベンゴール青年の運動、その三はライを指導者とせるパンジャブの運動であります。

このうち、最も夙く排英の火の手を挙げたのは、ヴレンティン・チロルが『印度不安の父』と呼べるパール・ガンガダール・テイラクであります。彼れの活動は一八八〇年頃から始まります。彼は、デッカン高原に拠つて昔ながらの印度精神を固持せるチトパヴン婆羅門の保守主義に革命の情熱を鼓吹し、その主宰せる二つの新聞によつて、盛んに排英思想を宣伝した。彼は勝れたる頭脳と、火の如き情熱とを併せ有てる上に、或る英人が批評せる如く、ノースクリツフ卿にも比ぶべきプロバガンダの才幹を具へて居たので、革命運動の指導者として無比の人物であり、多くの青年が彼れの感化を受けて、排英運動に参加したのであります。デッカンのマラータ族は、第十七世紀に回教徒の侵略と戦ひ、敵將アフズル汗を殺してマラータ帝国の建設者となれるシヴジに対して、深甚なる崇拜の念を抱いて居ります。彼はマラータ人に此の国民的英雄を追憶せしめるために、シヴジの誕生日を期して各地に記念祭を行つた。而してその記念祭に於ける参会者の言論が、すでに明瞭に英国打倒を公言して居ります。かくの如きテイラクの宣伝は、つひに一八九七年、チャカベル兄弟をして、プーナ街頭に英人ランドを革命の血祭に上げるに至らしめ、彼もまた此事に坐して囹圄の人となつたが、幾くもなく放免された。此時彼れの為に百方奔走して放免を早からしめたのは、実に近代東洋学者の随一たるマクスミューラー博士其人であります。何故に博士は、この激越なる危険思想家のために骨折つたか。それはテイラクが、その寧日なき政治運動の間に、印度精神の源泉たる吠陀聖典の研究に没頭しその業績を發表せる二つの著作は世界学者の珍として推賞せられ、推しも推されもせぬサンスクリット学者なるが故に、その学問を以てマクスミューラー博士と親交があつたからであります。この偉大なる天才の活動によつてデッカン高原に捲

起された風雲は、一九〇五年ベンゴール州面分問題に憤激せるベンゴール青年の運動と東西呼応して、いよく暗澹たるものとなつたのであります。

ベンゴール青年は、もとより此の『印度不安の父』の思想によつて動かされて居た。而も彼等をして一斉に奮起せしめた革命のパン種は、すでに述べたる如くアラビンダ・ゴーシユの哲学であり、その運動を實際に指導せる者は其弟バリンドラ・ゴーシユであつた。日露戦争に於ける日本の勝利に感激し、ベンゴール面分問題に激昂せる青年は、バリンドラ・ゴーシユを盟主として、一九〇六年のころ、アマシラン・サミティと呼ぶ秘密結社を組織し、印度独立のために一身を捧げることを誓ひ、ヨーロッパ革命運動に倣つて、掠奪・暗殺・爆撃を事とするに至つた。この陰惨なる戦の間に、バリンドラ・ゴーシユは、名高きムザツファル事件に連坐して、終身懲役の重刑に処せられたが、彼によつて創立せられし秘密結社は、彼れ去れる後、益々組織の網をひろげ、多くの青年を同志として、悪戦苦闘を続けて行きました。

第三にパンジャブに於ける運動は、尚武的精神を其の信者に鼓吹せる、アーリヤ教会によつて喚起されし国民的自覚が、ララ・ラージパト・ライによつて、政治的に転向せしめられたものであります。パンジャブ人は、印度に於ける最も実行的な種族であります。ライ其他の指導者によつて排英思惑を鼓吹せらるゝに及び、一九〇七年の初め、地租徴収の争が導火線となつて農民暴動の勃発となり、ライはその首魁と目せられて、突如捕へられてビルマに護送せられ、裁判も受けず、罪名も告げられずして、牢獄に投ぜられた。然るにライは、その学識、その重厚なる人物、その熱心なる社会事業によつて、独りパンジャブと言はず、全印度に亘りて最も徳望ある先覚の一人であつたため、彼に加へたる印度政府の処置は、はしなく全印度の激昂を招き、之がために一層排英の気運を煽るに至つたのであります。

かやうにして国民運動は、マラータ、ベンゴール、パンジヤブの三中心から、次第に全印度に拡まつて行つた。而して其の運動の方法は、ヨーロッパ革命運動のそれと全く同一であり、暗殺を以て威嚇し、言論文章によつて煽動し軍隊に宣伝してその叛乱を使喚し、かくして贏ち得たる力を糾合して、機運の際会を待たうとしたのであります。

印度政府は、この形勢に鑑み、一方は種々なる法令を發布して、思ひ切つた弾圧を国民運動に加へ、その主動者を殆ど一人残さず牢獄に投ずると同時に、他方には一九〇九年に所謂モーレ・ミント法を發布して、印度統治の上に若干の改正を加へ以て人心を懐柔せんとしました。而して此の政策は見事に効を奏し、印度の有識階級は、英国の好意に依頼し、漸を追ふて自治権の獲得に努むるを得策なりとし、わけでも当時の印度国民会議は、印度のグラッドストーンと呼ばれし穩健にして有為なる政治家ゴケールの指導の下に、双手を承けて此の改正法を歓迎したのであります。かくて世界戦の勃発まで、印度は一時小康を得たのであります。

## 六 印度国民会議

私は茲で印度国民会議について一言する必要を認めます。この会議は、一八八五年英人A・O・ヒュームが、印度人に政治的訓練を与へたいといふ親切から、時の総督ダツファリン卿の同意を得て、穩健なる印度有識階級の人々を語らひ、輿論発表の機関として組織させたものであります。此の会議は、一九三〇年一月一日ラホールで開かれた總會に於て、三千の代表者のうち、僅に六名を除く大多数を以て、印度の完全なる独立を決議し、その決議に従つて現に独立運動が遂行されて居るのでありますが、創立当初は決して今日の如きものでなかつた。第一回總會に集まれる議員は僅に七十名で、その言論は実に英国の印度統治の讚美でありました。議員の一人スブラマニア・アイヤルは、実に下のやうに申して居ります——「神の大慈大悲により、幾世紀の間、外国の侵略と掠奪との犠牲となり、内乱と

混沌との犠牲であつた印度が、偉大なる英国の支配の下に立つことになりました」と。三十年後に此の同一のアイヤルは、熱心なる排英主義者となつて、世界戦中に米国大統領ウィルソンに公開状を送り、英国は「吾等に教育を拒み吾等の同意なくして重税を課し、単に愛国の感情を吐露しただけで数千の同胞を牢獄に投ずる」ことを訴へて居ります。それは兎に角として、当初の国民会議は、極めて穩健なる自由主義者の会合でありましたが、数年を経る間に次第に世間の注意を惹き、議員の数も年々加はるに従ひ、当初の御用党的な調子は薄らぎ行き、印度の政治に対して忌憚なき批評を加へ、改革を要求するやうになりました。而して創立以後十年にして、会議は印度生活に於て重要な地歩を占め、政治運動に従ふ者は、皆な此の会議に対する態度を、孰れかに決めねばならぬやうになつたのであります。従つて急進派が、此の会議を自己の目的のために有効に利用せんと企て初めたことは怪しむに足りませぬ。若し此時に當りて、印度政府が、国民会議の穩健派を援助し、その勢力を守り立て、適當に指導して行つたならば、印度の政情は恐らく今日とは異なつて居たかも知れませぬ。幸か不幸か印度政府は、一つには国民会議の価値を過小に評価し、また一つには穩健派の態度が昔日の如く英国に忠誠ならざることを不快とせるが故に、国民会議に対して全く無関心の態度を採つた。かくて国民会議の穩健派は、急進主義者のために圧倒せられんとし、殊に一九〇五年前後、前に申上げた革命運動勃興の当時は、両者の間に会議を舞台として激しき争闘が行はれましたが、一九〇八年急進派の巨頭、悉く獄に投ぜらるゝに及び、国民会議はゴパール・クリシュナ・ゴケールの勢力の下に置かれ、一九〇九年の総会では、政府との協力を誓ひ、モーレー・ミント改革を熱心に歓迎したのであります。かくて世界戦勃発の翌年ゴケールが此世を去りしまで、国民会議は進歩的であつたけれど急進的ではなく、改革的ではあつたけれど革命的ではなかつたのであります。

## 七 世界戦中の印度

世界戦は印度の国民運動者にとりて、実に絶好の機会であつた。而も此時に当りて、ベンゴール革命青年の指導者ゴーシユ兄弟のうち、弟はアンダマン島に終身の懲役に服し兄は国を逐はれて仏領ボンダイシェリに蟄居して居た。パンジャブ革命の父ラージパト・ライも、また故国を逐はれて日本よりアメリカへ流浪の旅に在つた。デッカ革命の父テイラクは、牢獄六年の生活を終へて世に出て来たけれど、忠誠を英国に誓はしめられて、その腕を揮ふすべもなかつた。極左派の革命主義者はその指導者を欠いて居たのであります。それにも拘らず、血氣に逸る青年は、米国の同志ハル・ダヤールの指導の下に組織せられたる革命団と遙に呼応して、ラホール及びベナーレスに事を挙げんとしたが、皆な中道にして発覚し、印度政府が革命主義の撲滅を主眼として新たに発布せる印度国防条例によつて、数千の青年は一網打尽に牢獄に送られた。いま東京に住むラスビハリ・ボース君は、この運動の首謀者の一人で、万死に一生を得て印度を脱出し来れるものであります。

この過激なる一団を除けば、印度人は敢て大英帝国を覆すが如き積極的行動に出でやうとしなかつた。彼等の多くは、大英帝国の威力の前に、心ならずも忠誠を誓つた。彼等の或者は、英国の正義に信頼して、心から大英帝国のために粉骨碎身せんと決心した。そのうちの最も熱心にして且最も忠実なる英国の味方こそは、英国政府を世界最上の政治と信じ、英国の勝利を真心から祈りつゝ、自ら進んで印度政府のために名誉徴兵官として働いたモハンダース・カラムチャンド・ガンディ其人であります。ガンディ自身が斯う申して居る——『二十九年の絶えざる公的生涯のうち、他人ならば叛逆者ともなるべき境遇の間に立ちて、尚且英国政府と協力せる印度人は、予を除いて他に一人もない。予は実に四たび英国のために予の生命を賭した』と。まことに其通りであつて、世界戦の当初に於ても、軍事公

債と義勇兵募集とのために、全力を挙げて英国のために尽して居たのであります。而して其の同じガンディが、五年ならずして英国の最も恐るべき敵となつたのであります。而してこれは吾々の明かに心に留めて置かねばならぬ点であります。

印度の向背は、英国にとつて一大事でありますから、対独宣戦当時の英国は、朝野を挙げて此事を心配して居たのであります。然るに事情はいま申上げた通りで、印度は全体として英国に対する忠誠の意を表し、一九一五年ボムベールに開かれた国民會議に於ては、此年の春に世を逝りしゴケールの後をついで議長となりしシンハは、実に下の如く述べて居ります——『印度の王侯及び人民は、過去百五十年以上に亘り、その保護の下に平和と文明の祝福とを確保してくれたことに対し、偉大なる英国民に感謝の実を示すべしと互に誓ひ合つた』。かやうな次第で英国は、前後を通じて八十万人の印度兵を募集し、十七億五千万円の軍事公債を發行することが出来たのであります。従つて印度の形勢について樂觀を抱き初めたのも無理はないのであります。若し当時の印度事務大臣オースティン・チェムバレン及び印度總督ハーティンジ卿に、事物の真相を觀破する洞察があり、機会を掴む先見があつて、其後二年を経て一九一七年に行つた声明を一九一五年代に行ひ、一九一九年に実施した改革を、約束だけでもして置いて、動機は如何やうにもあれ、印度の英国に対する忠誠に対し、感謝の実を英国側からも示したならば、印度の形勢は今日とは甚しく違つて居たこと、私は信じます。

事実世界戦始まつて十五個月の間、英国は印度の忠誠に対して何等報あるところなかつたのみならず、兵士募集の方法並に軍事公債募集の方法が、次第々々に乱暴になつて来た。例へばマールタ族の一少年が、北印度の或る聯隊から脱走して軍法會議にかけられた。そして訊問の結果、その少年は母の旅行を見送つて、ハンケチを振り乍らプラットフォームで別れを告げて居ると、突如背後から徴兵募員が此の少年を捕へ、有無を言はず千哩を隔てた兵營に送

り込んだものであることが判つた。また公債募集や赤十字寄附金募集の際も、係員は、募集額の多少によつて、立身も出来るし為にもなると考へ、相應に無理なことをやつた。パンジャブ地方に於ては、実に之が為に人民の暴動まで起つたほどであります。

かくの如くにして印度人は漸く戦争を厭ふやうになつた。加ふるにトルコの参戦は、七千万を算する印度回教徒を不安ならしめた。一九一六年の後半に至りて、印度人の心理は急速に変化して行つた。沈黙を守つて居た国民主義者が再び活動し始めた。而して一九一六年十二月ルクノーに開かれた国民会議は、老雄テイラク及びアンニー・ベサント夫人の指導の下に、印度は「英帝国内に於ける自治」を欲求すべしと決議した。これは前年の会議と比べると、その変化は驚くべきものであります。

この形勢の変化が、漸く印度政府及び本国政府の反省を促がし、翌一九一七年に至り、或は綿布輸入税を七分五厘に引上げて印度紡績業者の意を迎へ、或は奴隷売買に等しきフイジ島労働移民法を廃止して、遅れ馳せながら民心の緩和に努め初めた。次でチェムバレンに代つてモンテーギューが印度事務大臣となつた。彼は事務の才幹に於ては前任者に劣つて居るかも知れませんが、大局を掴む洞察力を有し、また東洋事情に通じて居る政治家であつたので、恐らく時既に遅しと考へたらうと思ひますが、就任匆々、即ち此年八月二十日に二つの重要な声明書を發表しました。その一つは、漸次に行政の各方面に印度人を採用し、遂には英帝国の一部として責任政府を印度に確立したいといふこと、他の一つは、印度人を将校に採用することにするといふことであります。而してモンテーギューは、此年の暮自ら印度に赴き、印度の形勢を視察したのでありますが、ガンディーは此時に至りても、他の国民主義者が排英を叫びつゝ、ありしに拘らず、独り大英帝国への忠誠を叫んで居たのであります。モンテーギューの「印度日記」が、最近未亡人の手によつて出版されましたが、その中にガンディーがモンテーギューに向つて「予は英国の王位を守るために、数百

万の印度人を奮起せしめたり』と述べたことを書いて居ります。かやうにしてモンテーギューは印度視察約半年の後、一九一八年四月末英国に帰り、帰任後幾くもなく、即ち七月八日に、現行印度統治法であるところの改革案を、彼及び印度総督チェルムスフォードの名に於て発表したのであります。

この改革案は、一九〇九年のモーレ・ミント法に比ぶれば、実に思ひ切つた自由を印度に与へんとせるものであります。若し之が二年以前又は三年以前に約束されたならば、必ず多数印度政治家の歓迎を受け、その満足を買ひ得たものであります。然るに此の改革案が、二年又は三年遅れて発表された為に、却つて印度人の失望と反対とを買つただけであつたことは、吾々をして深刻に反省せしめずば止まぬものがあります。内外の政治に於て、大機を逸することとは、常に大事を誤ることとなる。それは時の古今、国の東西を問ひませぬ。

それはとにかく、この改革案にもとづき、十年後には成績を見た上で再び改正するといふ約束の下に実施されたのが、即ち印度の現行法であります。而して此の約束に従ひ、更めて改革案を起草するために任命されたのが、一九二九年のサイモン調査委員会であります。サイモン以下の調査委員は、詳細に印度の政績を調査し、その報告と建議とは、一九三〇年七月に発表されました。いまロンドンに於て開催中の印度円卓會議は、本来はサイモン案を基礎として討議が行はれる筈でありましたが、印度の輿論があまりに甚しく之を非難したので、折角のサイモン報告も、唯だ之を参考に供するといふことだけにして、一九三〇年十一月から、全然白紙といふことで印度円卓會議が開かれ、現に會議進行中であります。

## 八 印度に対する英国の不信

話は前後しますが、如上のモンテーギュー・チェルムスフォード案が発表されてから間もなく、即ち七月十九日に、

英国はいま一つ別個の法案を発表しました。それはローラット以下五名の委員が、印度に於ける革命運動の真相を調査し、且つ最も有効に之を取締る法律を立案すべき命令を受け、熱心に調査研究した上に起草したもので、ローラット法案と呼ばれるものであります。この法案は、曾て印度政府が、戦時非常法として発布し、戦争終結と共に必ず廃止すべしと約束せる印度国防条例を叛乱条例の名の下に、永久的の法律たらしめ、苟くも英領印度に於て、安寧秩序を害する危険があると認める者は、その何人たるを問はず、また裁判を経ることなく、直ちに之を逮捕・監禁・投獄する権力を、官憲に与へるものであります。ローラット報告を一読すれば明瞭である通り、印度の革命運動は、容易ならざる性質のものであり、従つて之を取締るために、峻厳なる法律を必要とするものでもありませんやうが、印度国防条例を唯だ名称だけ改めて、之を恒常的のものたらしめることは、少くとも公約に背ける不信の責を免れませぬ。

私は、モンテーギュー・チェルムスフォード改革案と、ローラット法案とを、殆ど同時に発表した英国のやり方は、甚しく拙劣であつたと考へます。これは恐らく一面に於て嚇威し、他面に於て懐柔することによつて、有利なる効果を収めやうとしたのでないかと思はれます。實際英国は、屢々此の策略によつて成功し、之によつて印度政治家の勢力を両分して、その排英運動を微力ならしめたことがあります。さり乍ら此度びは、この陳腐なる策略が、見事に失敗に終わりました。何となれば、堅き約束に背けるローラット法案を殆ど同時に発表した為に、折角のモンテーギュー・チェルムスフォード案が、毫も印度人を懐柔し得なかつたからであります。

印度人は、この英国の不信に激昂して、ローラット法案に反対するため、到る処に示威運動を行ひました。先に申上げたダイヤー將軍の虐殺は、翌十九年四月、アムリツツアルに於て行はれし市民の示威運動に加へられたものであります。この残忍極まる暴圧が、印度人の排英感情に油を注いだことは言ふまでもありません。殊に正義と人道と自由とを口にして止まぬ英吉利の本国人が、雷にダイヤー將軍の行動を非難せざりしのみならず、深甚なる同情を彼に

向つて注げることは、一層英国に対する信頼の念を失はしめました。

かて、加へて、此年英吉利とトルコとの間に結ばれたるセーヴル条約は、ロイド・ジョージが、世界の面前に於てなせる、印度回教徒との約束を破れるものであります。ロイド・ジョージは、世界戦中に印度回教徒の協力を得たいために、よし戦争が如何に終結しやうとも、トルコの回教宗主権は立派に之を保全すると約束したのであります。然るにセーヴル条約は、全く之を裏切つたのであります。この不信は、従来むしろ親英的なりし回教徒を駆りて、俄然排英運動を開始するに至らしめました。回印回教徒は、英国の所謂『ディヴィッド・エンド・ルール』の政策により、常に反目嫉視して来たもので、両教の先覚、夙に之を憂慮し、屢々之が和合を企て、成らなかつたのが、今や此事ありしために、両者初めて手を携え、排英共同戦線を張るに至つたのであります。

最後まで英国の友人たりしガンディをして、最も恐るべき英国の敵たらしめたのは、他なし英国の印度に対する背信であります。曾て英国政府を以て『最上の政府』と信じ、四度びまでも其為に生命を賭して悔みざりしガンディは今や之を以て『悪魔的政府』と考へ、印度を其の支配より解放するために身も魂も献げ尽すに至つたのであります。此間の経緯を思ひめぐらせば、私は真に感慨無量であります。世の中には『朝鮮にガンディのやうな人が出たら大変だ』なぞと申す人があります。それはガンディの為人と、印度国民運動の由来とを知らぬ人のいふことであります。繰返して申上げる如く、ガンディは最後まで英国の味方であり、その純一聖潔の魂を、英国を善くするために献げて来たのであります。若し朝鮮にガンディの如き聖雄が現れ、日本の理想をわれの理想とし、身命を抛つて其の実現に尽してくれるならば、日本にとりて是程ありがたいことはありません。若し日本が其人を裏切るならば、それは朝鮮を失ふかも知れませぬが、もとより自業自得と申す外はない。また朝鮮人にしても、ガンディの魂なくして、唯だガンディの排英運動を真似るだけならば、それは日本に取りてうるさくはあるが決して恐ろしくはありません。印度国

民運動の由来は、かくて吾々に幾多の重大なる教訓を与へるのであります。

ガンディに指導せらるゝ印度独立運動の経緯は、これまた吾々の心を籠めて研究すべき事柄であります。茲では独立運動の由来を説くに止め、他の機会に於て印度国民運動の現状を述べることゝ致し、これで私の只今の講演を終わります。